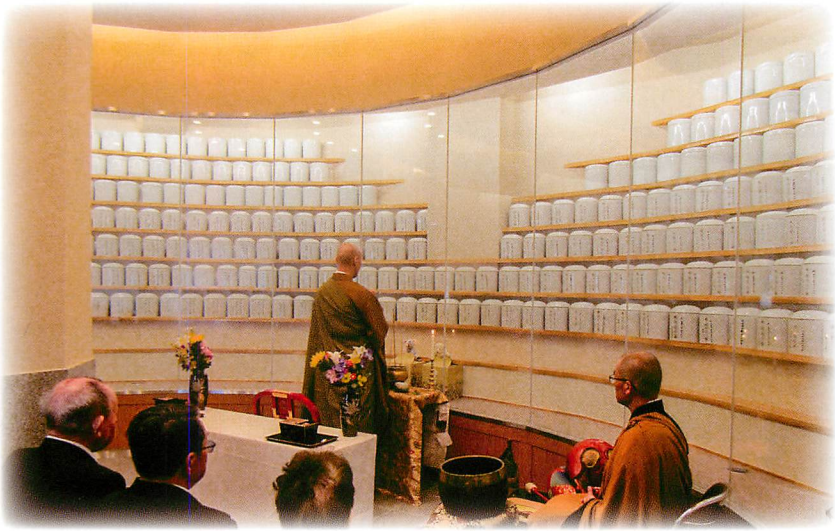
甲田の裾

KŌDA NO SUSO



6月20日　納骨堂改修落慶法要式

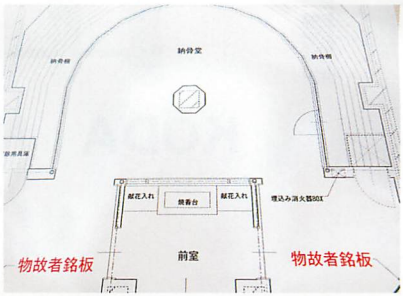
2019
3号
通巻699号

松丘保養園の機関誌

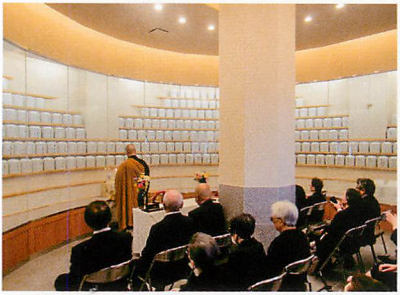
納骨堂 改修落慶式

令和元年６月20日

５月末まで本館１階交流ホールに
設置された仮納骨堂。



新納骨堂図面



６月20日、恐山院代 南　直哉和尚が
導師を務めた落慶式。

堂内にはあずましいソファー

入り口左右には開園以来の物故者1,687名
のお名前が刻まれた鉄板を設置

ベンチも設置されいつも花が絶えない
エントランス

甲田の裾 令和元年3号　通巻699号 目次

—納骨堂改修落慶式—

命を照らす場所 …… 恐山院代　南　　直 哉 … 2

ごあいさつ …… 入所者自治会　会長　石 川　勝 夫 … 5

納骨堂改修落慶への感謝 …… 松丘保養園　園長　川 西　健 登 … 7

納骨堂銘板名簿作成に当たって …… 福祉室 … 10

松丘の子どもでした …… 元 二葉分校生徒 … 12

第15回ハンセン病市民学会に参加して …… 木 村　龍 一 … 15

詩　ペンギンが居た …… 木 村　全 十 … 20

　　昔へ行った …… 木 村　全 十 … 22

第14回　思い出食堂

　ホッと一息　心も体も温まる思い出食堂

…… 看護師　藤 森 布弥子 … 25

思い出食堂 …… 木 村　龍 一 … 28

社会交流会館だより …… 学芸員　澤 田　大 介 … 30

ニューフェイス紹介・人事異動 …… 34

読者からのお便り …… 35

自治会日誌 …… 36

編集後記 …… 38

表　　紙：6月20日納骨堂改修落慶式

写真提供：福祉室

命を照らす場所

恐山院代　南　直哉

私と松丘保養園の縁を結んで下さったのは、園の眼科医をなさっている橘先生で、確か四年ほど前、先生が恐山に来訪された際、園への訪問を強く勧められたのが、事の始まりである。

「どうです、いらっしゃいませんか？　ご紹介しますよ？」、

そう声をかけられたとき、私は「是非」と即答した。これには理由がある。

私は、今から四〇年ほど前に露わになった、曹洞宗における「被差別部落」問題をはじめとする差別・人権侵害問題について、修行僧時代から関わりがあり、かなり早い時期から、ハンセン病をめぐる人権侵害の問題に注目していたのである。

というのも、ハンセン病については、古来、宗教的な教義や観点から差別を肯定し助長するような言説が、数多くあったからである。

とりわけ仏教の場合は、「因果応報」説や「業・輪廻」説を駆使して、ハンセン病患者が追い込まれた不条理で過酷な境遇を、「前世の悪業の報い」であるかのごとく説明して、その境遇を「自業自得」として忍受すべきよう「説教」してきた歴史がある。

このことを、私は文献の上では学んでいた。しかし、その当事者の肉声を聞く機会は、ずっと得られないままだったのである。

橘先生に連れられ、初めて川西園長先生にご案内いただき、園の方々にお会いした日のことは、今も強烈な印象として記憶に鮮明である。その日、私は入所者のある方に、どうしても伺いたかったことを、ついに尋ねた。

「ハンセン病を前世の悪業の報いだと説くお坊さんの法話を、聞いたことがありますか?」

その方は言った。

「坊さんの話はそればかりでしたよ」

この一言で、私は仏教者として自分がハンセン病に対して負うべき「責任」のあることを、身に染みて思い知った。

その時お参りした納骨堂の床下にご遺骨のあることが、あれほど気になったのは、この「責任」の自覚と無縁ではあるまい。ただ、そのとき私が口走った、

「園長先生、ご遺骨を足の下にするのは、何か申し訳ない気持ちがしますね」

という呟きを、園長先生を始め園の皆さんが、これほど早く、この度の納骨堂改築の大事業に至るものとして受け止めて下さるとは、当時知る由もなかったが。

その後も私はお招きを受けて、園の物故者諸精霊をご供養する法要をさせていただいた。そのたびに、参列される園の方々の柔らかいけれども強く、控えめながらも秘め難い、亡くなられた方々への想いと感情を、私はほとんど皮膚で感じていた。それは、おそらく私などには想像もできない、深い悲しみの共有から迸るものなのだろう。

いま、私は改めて恐山を訪れる人々を思う。

恐山でイタコさんの口寄せを求める人や、宇曽利湖の浜辺で懐かしい人の名前を何度も呼ぶ人は、「あの世」や死後の「霊魂」の実在を信じて、そうしているわけではない。彼らに実在しているのは「幽霊」だの「霊魂」だのではなく、「死者」なのだ。

「死者」は実在する。「死者」は消滅した人で

はない。「生者」とは別の在り方で実在しているのだ。生きていても死んでいても親は親であり、子は子だろう。大切な人は大切な人であり続ける。

八十歳をはるかに過ぎていそうな老女が、登山で使うような巨大なリュックを背負い、体をくの字に曲げてやってくる。そして、境内のあちこちにあるお地蔵様を巡りながら、何度も荷を上げたり下ろしたり、中からあらゆる種類のお菓子や果物や飲み物を取り出して、丁寧に並べながら繰り返す。

「じっちゃあん、今年もきたよ～、じっちゃあん、やっぱり暑いねえ」

彼女はなぜ毎年来るのか。簡単である。「じっちゃん」が恐山にいるからだ。「じっちゃん」は恐山で、今なお彼女の生きる意味、つまり「命」を支えているのだ。

面目を一新した納骨堂に安置されたご遺骨や、銘板に刻まれた故人のお名前を拝したとき、私は思った。この亡くなられた方々も、今なお園の皆さんの「命」を照らし出しているのだろう。我々の命は結局、あの老女同様、「死者」ぐるみでしかありえないのだ。

「この納骨堂にはベンチを置きたい。入所者の方々の心のより所として、安らかな気持ちになれる場所であってほしいのです」

そうおっしゃった園長先生の穏やかな声の底に、痛切極まりない「命」への想いがあることを、私はあの日、確かに感じたのである。

南　直哉　長野県出身。早稲田大学第一文学部卒業。一九八四年曹洞宗で出家得度。福井県霊泉寺住職、青森県恐山菩提寺院代（山主代理）
著書：『恐山　死者のいる場所』（新潮新書）、『超越と実存「無常」をめぐる仏教史』新潮社、『仏教入門』講談社現代新書、『生死の覚悟』高村薫との共著新潮新書　他多数

ごあいさつ

入所者自治会　会長　石川勝夫

本日ここに、納骨堂落慶記念式を挙行するに当たり、ご挨拶を申し上げます。

本納骨堂は、平成三十年度施設整備計画に基づき国費予算により昨年十二月より工事が開始され、本年五月二十二日の最終検査を終え、念願の完成に至ったものであります。

当園は明治四十二年四月、一道六県連合立として開園され、爾来今日まで一一〇年の歴史を刻んでまいりましたが、この間、療友一、六八七名、保育児童十五名、生まれることなく亡くなられた子供二名が悲運のうちに病没しており、没後もその多くは故郷に帰ることさえ叶わず、この地に淋しく止どまざるを得ない状況が今なお続いております。

この度は納骨堂内部を改修することにより、地下に放置されていた八八八柱に及ぶ雑骨となっていた御遺骨を、骨壺に収納し陳列させていただきました。現在、保存されている骨壺安置者二六四柱と仮安置されている二胎児の骨壺と共に安置されております。

ハンセン病療養所の過去を顧みる時、筆舌に尽くし難い誠に悲惨な時代が長く続きました。

ハンセン病患者はすべての人権を奪われ、国策による民族浄化の美名のもとに強制隔離を唯一の

施策として厳重に監視されながら療養所に閉じ込められて、満足な医療も受けられず、極貧の生活を余儀なくされ、果ては病躯をおしてまで所内作業に従事しなければ懲罰の対象として、食事すら絶たれるという過酷な苦難を背負わされて非業のうちに生涯を閉じなければならなかったのであります。

これらの誤った国による施策が、いたずらに社会の差別・偏見を助長させ、幾多の悲劇が繰り返されてきております。

そのような中、現在の療養所を取り巻く情勢は少しずつ好転の兆しが見られ、医療、生活、その他全般にわたり社会情勢の好転と相俟って、関係者の理解も深まると同時に、長年に亘る先輩の皆様方より引き継いだ運動の成果も加わり、大きな変化と進展を見せるようになりました。

これもひとえに、松丘保養園関係者の皆様のご尽力の賜と感謝の念を深くするものであります。

本骨堂には開園以来、苦難の果てに不幸にして逝かれた一，一五二柱の御遺骨を、元園長中條資俊先生の御遺骨と共に安置しお慰めしたいと存じます。

本日は園長並びに職員の方々、工事関係者と直接ご協力を賜った方々を始め、入所者の皆様ご参列の元に本骨堂の落慶式を執り行うことができました事を心よりお喜び申し上げます。

新装なった本骨堂において安らかにお眠りいただきますよう祈念申し上げ私の挨拶といたします。

納骨堂改修落慶への感謝

国立療養所　松丘保養園　園長　川西健登

初夏の風が爽やかなこの日に、松丘保養園納骨堂の改修落慶法要を執り行うことができましたことは誠に喜ばしく、ご参列下さいました入所者のみなさま、ご来賓のみなさまに心から感謝申し上げます。

昨年八月二十二日に改修前の法要を執り行い、九月から実際の工事に入り、完成は予定より少し遅れて令和の五月になりました。この間、入所者自治会の石川会長をはじめ役員のみなさま、各宗教団体の責任者の方々に相談しつつ、入所者のみなさまに説明し賛同をいただきながら進めてまいりました。実際の工事にあたっては創設計、倉橋建設をはじめ多くの業者のみなさま、そして厚生労働省の担当の方々の並々ならぬご尽力をいただきました。あらためて厚く御礼申し上げます。

この納骨堂には早朝から昼に夕に入所者のみなさまがそれぞれに、ある方々はシルバーカーを押してお参りされています。直接ここに来られない方々にとってもこの納骨堂は入所者とそのご家族のみなさま、そして保養園を想う人々の心の中にあります。昨年、ある高齢の牧師さんが生涯三度目の、そしておそらく最後の巡礼になるだろうとおっしゃってこの納骨堂にお参りされ、昨日召されました神子澤新八郎さんをお見舞いされたことが思い出されます。

松丘保養園ではその前身の北部保養院が明治四十二年に創立されてから今年の四月までの百十年間に一、六八七名の入所者が亡くなっておら

れます。この納骨堂には在宅で亡くなられたり、ご家族に引き取られたり、それぞれの宗教関係の施設に埋葬された方々を除く一、一五二名のご遺骨が納骨されています。そのうち八八八名の入所者についてはご遺骨が長い歳月の間に個人として識別できない状態になり、纏めて地下にお納めしていました。問題はそのご遺骨が土に還れない状態で足下の地下に納められているという構造に関わること、もうひとつは物故者のご芳名が銘記されていないこと、つまりその八八八名の入所者は無名のままで納骨されていることでした。

ご苦労にご苦労を重ね、幾多の苦難を乗り越えて力強く立派に生きられた入所者のみなさまの御霊が生き続けるこの納骨堂に相応しい形はどうあるべきか、私たちはそのことを考えてきました。納骨堂は単に物故者のご遺骨をお納めする場所にとどまらない、この納骨堂は残された入所者やご家族のみなさまがご遺骨の傍らでありし日日を回想しながら御霊とゆっくりお話しできるような場でありたい、そして許されますならば私ども職員や地域のみなさまもそこでいっしょに追悼させていただけるような明るく開かれた納骨堂でありたいと考えてまいりました。

このような私たちの思いは四年ほど前、最初に保養園に来られた南直哉和尚さんの言葉に後押しされる形で改修計画が具体化し進展しました。改修の要点は地下に納められていたご遺骨を引き上げて骨壺に分けてお納めし、お参りする方々がこころ安らかにご遺骨に相対して向き合うことができるような形に安置させていただくこと、そして骨壺にご芳名を銘記することができませんでした八八八名を含めて、創立以来亡くなられた全入所者一、六八七名の尊厳と名誉のために、ご芳名を本名で銘板に刻んで堂内に掲げさせていただくことです。実際、人によっては骨壺のお名前が園名で記されている方もありますが、銘板に刻むご芳名は本名であるべきだというのが外部委員も含めた倫理委員会での審議を経

た結論でした。尚、この入所者物故者名簿の確定は大変困難な作業でありましたが、当園福祉室職員の努力によって完成したことを申し添えます。

折しも明後日六月二十二日は「らい予防法による被害者の名誉回復および追悼の日」にあたり、明日二十一日には厚生労働省で記念式典が執り行われます。入所者のみなさまの長年に渡るご苦労に対して心からお詫びし、謹んで哀悼の意を捧げます。

最後になりましたが、恐山菩提寺院代であられます南直哉和尚様には四年ほど前からお交わりをいただき、和尚様からいただきましたご助言をもとに入所者のみなさまと相談しながら今日の納骨堂改修の落慶に至ることができました。この間賜りましたご厚誼に心から感謝申し上げます。本日はご多忙の中、この落慶法要のためにご来園いただきました。ほんとうに有り難うございました。

願わくは、新しく改装させていただいたこの納骨堂で、ここで生涯を送られ、中には無念のうちに逝かれた入所者もおられるはずですが、その方々の御霊がこの納骨堂で安らかであられますように、そして今尚、訪れる私たちに語りかけて下さいますように、その声を聞き届ける私たちでありますように、そのような明るく開かれた場としてこの納骨堂が未来に向かう松丘保養園の中心的な場で在り続けることを願って、感謝のご挨拶に代えさせていただきます。

令和元年六月二〇日

追記

落慶法要の後、入所者のみなさまがこの納骨堂の改修を喜んでいるとおっしゃってくださることを何よりもうれしく思います。骨壺や物故者本名の芳名板が設置された納骨堂内部への立ち入りは個人情報保護の観点から現在のところは制限せざるを得ませんが、いつの日か誰でも自由に入れる時が来ることを待ち望みたいと思います。

納骨堂銘板名簿作成に当たって

福祉室

川西園長より、改修工事が予定される納骨堂の壁面に開園以来の物故者の本名・逝去年月日を刻みたいと話があったのは、一年位前のことでした。

歴代の福祉室職員作成の物故者名簿はあったものの、後世まで残る銘板ですので、間違いがあってはならない、責任重大な作業です。

まずは、今現在名簿として残されている開園以来の全入所者の本名、生年月日、死亡年月日を過去台帳（書類）と照らし合わせ確認する作業を始めました。

確認作業に当たり、参考にしたのは、『患者異動日誌』、『患者入所調書』、『患者収容書類』、『本籍別患者名簿』、『死亡患者名簿』、『患者カード』、『納骨名簿』、『死亡届綴』などです。

『患者収容書類（昭和十六年七月改）』は、薄紙に墨を使い筆文字で書かれており、明治四三年頃から昭和十六年頃までの北部保養院患者の入出所が詳細に記録されています。収容年月日、送致官署名、本籍地、氏名、年令（生年月日）が記されています。

この書類は墨の文字の部分が抜けていたり、紙が劣化している頁もあり、取り扱い、判読には苦労しました。余りに達筆過ぎて読めない文字もあり、何度も確認しました。

『患者異動日誌』は、昭和二十三年頃から三十四年頃までの入出所記録です。この時代は、逃走の文字がかなり目立ってきています。

『患者カード』は、昭和十六年頃からの患者個人の記録です。

佐藤有範医療社会事業専門職が中心となって、忙しい通常業務の合間に開園以来の一、六八七人

（令和元年六月現在）のお名前、生年月日、入所年月日、死亡年月日、埋葬場所等をお一人ずつデータに打ち込むところから始めました。そして、それを他の職員が確認し、そしてまた佐藤専門職が確認と二重三重の体制で臨みました。

現存する名簿では、死亡年月日は記載されていますが、生年月日までは判明しておりませんでした。今回享年を入れるということで、過去台帳を基にお一人ずつ生年月日を調べあげ、享年を計算するのですが、古くは弘化、嘉永、安政、万延生まれの方もおりました。生年月日欄には「当〇〇年」と記入され、入所時には生年月日も言えない位衰弱していたのか、と思われる方もおりました。入所月日、死亡月日から、入所してすぐ亡くなっている方もおり、どのような経緯で保養園まで辿り着いたものか、調査の手を止め思い巡らすこともしばしばでした。

有識者のアドバイスも戴き、旧字体は現代字体に直し、作字のものは出来る限り現代字体にしました。

今回の調査では、今まで名簿に載っていなかった入所者一人の存在を確認することができました。また名字、名前が新たに判明された方も何名もおり、保養園創立一一〇周年という節目の年に改修された納骨堂に正確なお名前を掲示することが出来たことは私達職員にとっても貴重な仕事を為し終えた思いです。

普段、納骨堂の中は鍵が掛けられ焼香台からは磨りガラスを通してしか見ることが出来ないので、ご芳名銘板は一般の方は目にすることがないかも知れません。しかし、一、六八七名の入園者が確かにここ松丘に存在した証しが刻まれております。

どうか中に入る機会がありましたら、お名前と享年をご覧になり、お一人お一人に想いを馳せ、松丘保養園の歴史の重みを感じて欲しいと思います。

（文責　石田史子）

松丘の子どもでした

元 二葉分校生徒

あの少年時代から度々の引っ越し。薄れかけた記憶の証が残っている。

「昭和二十八年度、担任木村みつ江」「昭和三十年度　担任　梅原秀之」両先生担任名の通信簿二通と、「昭和三十一年三月十九日青森市立新城中学校長　中村政勝　第九八三号」立派な文字の卒業証書、どちらもかなり変色している。

六年生の二学期、

「明日から学校に来なくていいから」

校長先生から言い渡された一言で、学校からも地域からも、私の居場所が無くなってしまった。半年も通学無しだったのに、卒業証書と空白のある通信簿を近所の子どもが届けてくれた。

四月、地元の中学校に私の学籍が無かったようで、新一年生の教科書が手元に届く事が無かった。

病院（療養所）に学校があると知らせがあったようで、家を離れる事にした。

近所の誰とも会わないよう朝早く家を出た。初めて母と一緒に汽車の旅でしたが、会話は殆どなく、不安を抱え着いた所は県内なのに、話す言葉も違い、遠くへ来てしまったと思った。

子ども寮の男の子部屋はぎゅうぎゅう詰めで、寮父母の部屋で寝起きする事になった。

寮近くに校舎もあった。中央に職員室とピンポン台を置いてある部屋があり、左右に小学生用、中学生用の教室が一つずつ、どちらも複々式授業

でした。

秋田県出身の入所者の先生は、ガリ板でプリントを作り教材として使い、全ての時間を私達子ども中心に動いてくれているようで、担任のような存在でした。北海道出身の数学担当の先生も入所者の人で、手に後遺症があり、授業に熱がこもると長いチョークがよく折れた。園職員の薬剤師の人は、英語が分かるとかで教師として派遣され、先生らしく教えてくれた。予防着姿から、仕事場から直行かと思っていた。通信簿に担任として名前のある木村先生は、小学生の授業が中心で、音楽と裁縫を教わった記憶だけが残っている、先生は足に魚の目があるとかで、片足をかばい歩いていた。

梅原先生は絵の得意な先生だったと心のどこかに残っているのに、描いた絵も絵の授業も記憶に残っていなく、野球グランド近くに中学生用として建ててくれた校舎から思い出が始まっている。教室が二つあり開放感がありました。療養しながら高校教育を受けさせて欲しいとの、悲願が実り設立された学校（岡山県長島愛生園にあった邑久高等学校新良田教室）への進学を目指す私達のために、授業だけでなく夕食後子供寮まで来ては、補修授業のように教えてくれ、先生の熱意を感じました。

誰が話し合い決めたのか、子ども達全員、園名を各自作り、日常生活から本名が消え、当時作文を書くと、自治会機関誌「甲田の裾」に本名の一字だけ変え、発表していたので、そのためかなあと思っていました。

子ども達の中に、保養園から近い所の出身者がいたからと、後になって聞いたことがあります。

小中学生全員と、先生寮父さん、看護婦さん同行で、夏泊半島茂浦の海の海岸へ行った事がありました。よく言えば自然いっぱい民家も無く、隔離されている事を感じさせないように気遣いながらも、世間を気にして生きた時代であったように思います。

保育所の子どもがどんな所に住んでいるのか、学校はどうしているのかも知りませんでした。令和元年六月二十八日、ハンセン病家族訴訟裁判判決が熊本地裁でありましたが、その訴訟原告の一人が、保養園の保育所から新城の本校へ通学していた事を初めて知りました。

私は園外へ意識を向ける事もなく、新城中学校がどの方角にありどの位遠くにあるのか想像した事もなく遠い存在でした。

二十歳で保養園から退所出来ましたが、履歴書に新城中学校名を記入する事が出来ませんでした。遠い存在に感じていたからではなく、実家から遠く離れた学校の卒業理由を、適当に説明する自信が無かったからです。

郵便物の住所は保養園ですし、県内での就職はあきらめ関東に出てしまいました。学歴も職歴も作ってしまった経歴詐称の履歴書を二度も書きました。

交流の幅も狭め、病歴を隠し通し今もカミングアウトしていません。

松丘の子どもとして、数年暮らした人達がどこでどのように生きたのか、生きているのか、それぞれの人生を精一杯生きている事を願うばかりです。

残る年月を数える年齢になりました。数々の出会いの度に、心の解放を感じます。生きて来た証を何かの形で伝えるのも、老後の生きがいになるのかと考えています。

※この文章は、社会復帰されているＳＳさんより、左記のお便りと共に送られてきたものです。（編集部）

甲田の裾二号は新城中学校との交流や二葉分校の歴史等の内容が沢山あり、繰り返し読んでしまいました。二葉分校の変せん期に生徒として在籍していましたので、その後の人生も含め、他の人から見たら変わっているかも知れませんが書いてみました。

第十五回ハンセン病市民学会に参加して

木村龍一

みるく世間（ゆん）かてい～差別に屈しない～

全体の統一テーマでした。

現地の言葉で、

「差別のない平和で豊かな世界に向かって」

そのような意味になるそうです。

沖縄での昨年に続く開催は、それなりの重いテーマが多く、内容はこれからの課題として学んで行くことになります。

全国の療養所に行くこと、その土地の飲食に興味で参加していますので、恥ずかしい限りです。お叱りを承知で道中記を書かせていただきます。

大会は五月十八日、八重山集会一〇時となっています。飛行機を乗り継ぎ会場着は十四時過ぎとなりますので、全体会を含みレセプションの参加となります。いずれのレセプションにも不参加が私の対応です。

今日中に宮古に移動するスケジュールを考えると直接宮古へ入るスケジュールに決定していました。付添の方がおられるので、自分の都合ばかりとは行かない状況です。

園当局の配慮があり、前泊も認めて下さることとなり、スケジュール外の時間も活用できることになりました。

阿部さんと言う方が参加しておられたことで、現地の方々との交流にも繋がり、前泊の夜は大いに盛

り上がりました。

まず出発まで時間を戻し、様子を記して参ります。

五月十七日は天気にも恵まれました。十一時、松丘で付添って下さる方と待ち合わせでした。たまたま甲田の裾の発表の日、文通している方の封書とともに出発しました。数日前にタイ国の旅の折に親しくなった看護師の阿部春代さんから現地で逢う連絡も入っていました。

羽田着、石垣空港搭乗の合間を利用し一回目の乾杯と相成りました。私の方からお願いすることはありませんが、飲める方と同行できることは、気分的にも嬉しい限りです。

石垣までは約三時間のフライトです。青森からと同じ機種、二五〇人ほどの旅行者は観光客なのでしょうか、満席でした。

空港着とタイミングよく阿部さんとの連絡もついて、まずホテルにチェックイン。待ち合わせの夕食の店へと向かいます。六人での乾杯となりました。現地のおすすめ料理と泡盛で満腹です。

阿部さんは一足先に現地に入っておられ、夕食を共にしておられた方は、大会の代表の一人とのこと、退所者会の代表もしておられる方でもありました。ご苦労話の一言一言に重さがあり、お酒の方もなかなかのピッチ、時間がたちまち過ぎてしまいました。私はチョンマゲをしているので、何かをやっている人！そんな第一印象のようでした。名刺もいただきました。次につながればと楽しいひとときでした。こちらは、ソバも有名だそうで、ソバで締める人も多いとか。私共も帰り道、しっかりと別腹に押し込んで初日でもあるので、ここまでとしました。特別汗の方も大変というほどでもなく、内容の濃い前泊は終了しました。

二日目　八重山集会は市民会館で一〇時から始まりました。プレ特別企画、開会のセレモニー、映画「執念の毒蛇」、総会報告と続きます。シンポジウム

「島を出た八重山人たち」では、入所者、退所者の歴史が語られ、社会人として生活をして来た私も同じような想いをしていたことが蘇り熱いものがこみ上げて来ました。会場からの拍手もあり、大いに盛り上がりました。

三日目　大会二日目は十九日（日曜日）宮古に会場を移し十時より市民劇場に於いて集会が開かれました。主催者の歓迎挨拶の後、「執念の毒蛇」という無声映画が上映されました。沖縄最古の貴重なフィルム、ハンセン病のからむ内容でした。

ディスカッションの多い内容は多議に渡り、メモを取っていても右から左状況のまま区切りとなってしまいました。レセプションは遠慮しました。私の勝手に付き合うしかない相棒は、どうも泡盛より飲み慣れているグラスをグイグイ、いけるようです。難しい話より、身近な雑談で私的にはいい時間です。彼等と私達は接点が少なく、顔のみ知る方も多いのです。こんな機会こそ、ほんの少しでも話すことができればと考えておりました。

前泊の夜に食事をした知念さんは大会の協同代表ということもあり、実に出番も多く、活動的な方で、とても八十歳を越しているとは思えないパワーの持ち主でした。

今日のスケジュールは午後からのスタートなので、午前中は観光の下調べをしておりましたが、あいにくの雨でした。昨年観光した屋久島は五十年振りの被害のようです。とにかく出掛けることにし、タクシーで出発する。宮古と伊良部は四kmもの橋でつながっているそうです。まずそこに行くことにする。幸い天気も回復したので絶景ポイント、海中散歩するように間近で体感しているような宮古島海中公園など廻り、昼食場所探しは、プロドライバーもかなり苦労していました。こちらでの状況があるようです。宮古そばで腹ごしらえしての会場入りになりました。

四日目　大会は三日目に入りました。ようやく南静園が会場なのでドキドキ状態でのバス移動です。

全国十三の療養所の中で、一般医療の場として地域に開かれている療養所という特殊性があることで知られています。和光園同様、子供のいる入所者も多く、孫を連れて会いに来る光景も珍しくないようです。入所者と家族・市民との共生のモデルでもあるようです。路線バスが治療棟の入り口まで来る風景。松丘では多分見ることの出来ないことのようです。園内に広がる雑草地を市民に開放することさえ、出来そうで出来ないことなのです。

四階建ての会場に二つの分科会。学芸員が着任したこともあり、関わる資料館のミッションに関心がありました。四人のパネラーが立場上の本音が語られたように感じました。

全体会もこれから課題と弱体化する組織の中で方針のあり方に苦慮している現状のように感じました。

私が最も関心のあるフィールドワークは雨のため中止でした。ズブ濡れ覚悟でも行きたい希望に十人以上がおられたが、私は行かないグループにしました。残った人達のため、知念さんの講話に変更、ご自身のこと、退所者の会長として活動しておられる方です。子供が授かったのは医療ミスのようなショッキングな裏事情をサラリと語ってくださいました。その方当人に空港からホテルに送っていただきました。今回の市民学会に偶然参加された阿部春代さんを通して思い掛けない出逢いになっており、驚くやら感謝やら、この後の活動につながるよう心掛けて参ります。

明日のオプショナル企画を控えていますが、ライブのある居酒屋で盛り上がったことは書くまでもないことです。

五日目　大会最終日は宮古市内を巡るオプション企画。「平和学習ツアー」は観光とは一味違っていました。

宮古南静園は空襲で施設が大きな被害を受け、壕に避難したものの飢えと無治療で多くの死者が出たそうです。

本土防衛のため宮古島には三万人が駐屯して上陸に備えていて、弾薬庫としても重要な役割があったようです。そして今、アメリカの都合で秘密裏に拡張の動きに対して住民の考え方も割れているようです。昨年辺野古埋め立てに関わるゲート前の衝突を見る機会になりましたが、宮古も同じような事情を含んでいるのかも知れません。私達はどうすることもできないのでしょうが、学ぶ機会には真っ正面から向き合うようにしたい。現場のフェンスばかりがやけに頑丈なのが気になりました。

案内の方の説明は分かりやすいものでした。大型バスも細い道を行ったり来たり、空港は近いと言いつつも時間切れで終了となってしまいました。

空港着、出発の時間を知らせるテロップに約二時間遅れを表示している。ハプニングの始まりとなった。羽田までは行ける。しかし、今日中に青森には帰れないようです。関係者への連絡、宿泊、チケット等、ＡＮＡからＪＡＬへの乗り替えも加わり、かなりややこしいことになっている。付添の方とＡＮＡの係りの方の細かい打ち合わせが進むが相当の時間を要した。

応分の負担は覚悟していたが、明日一番機の出発、特例のホテルが決定。自腹もなし。四時間近く対応で振り回されたが、ようやく腹ごしらえのタイムとなる。飲食店も閉店時です。羽田のコンビニも覚悟したが、折しも開いている店が見つかりようやく腹の方も納得したようです。相部屋でのイビキの大合唱は早く寝た方が勝ちとなる。半日余分のスケジュールでしたが、何とか園にたどり着きました。いろんな含みのある中身の濃い旅であったことは確かなことです。

付き添っていただいた方に感謝しつつ、ご報告の一文とさせていただきます。

詩

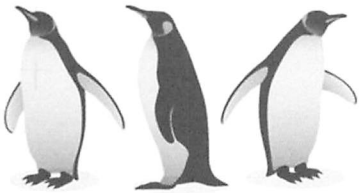
ペンギンが居た

木村全十

ペンギンが居た
肩をゆらしながら歩いていた
プールの中を泳いでいた
ここは水族館の一隅　ペンギンの館
そんな中プール際の
岩の上にチョコンと立つ一羽のペンギン
こっちの方を見ていた
手を振ってみる　反応なし
じーっと見ている
あれはきっと僕らを通りこして

遙か遠くを見ているのだ
南の島の青い空と海と
確かにあった　ひたすらに生きた
キラキラの物語を
見ているのだろうか
じーっと見ている

悲しくなって来た



昔へ行った

木村全十

薄曇りの午後
丘の向こうの山の稜線を目で辿り乍ら
僕は昔へ行ってみることにした

どこからが昔という領域なのだろうか
おぼろに靄(もや)った視界の中
千切れた記憶を拾い集めながら行く
見覚えのある家の角を曲がると
かくれんぼの庭があった
柿の木が無音の中に立ちんぼしていた
四つ葉のクローバーを探しっこした

畦道を抜けると川が流れていた
橋の袂(たもと)に若い女が立っていた
僕の母だという
まだ幼かった僕を残して去った人
想い出のかわりに憎しみだけを残して行った人
どうやら泣いているようだ
頬を伝って光るものが流れ落ちるのが見えた
憎しみが溶けて悲しみに変わったとき
川べりの野草がゆれた
せせらぎが音になった
僕が長い間探していたもの
かくれんぼの鬼をしながら探していたもの
ようやく見つけたとき

靄が消えて僕の昔は僕だけの
小さな歴史となって遠ざかった

薄雲りの午後を
カラスが鳴きながら飛んだ
なぜか泣きたいという思いが
こみ上げてきた
泣くことにした
声を出して泣いた
誰にも聞こえない声で

第十四回　思い出食堂

ホッと一息　心も体も温まる思い出食堂

看護師　藤森　布弥子

二月二十八日第十四回思い出食堂を開催しました。会場となる社会交流会館前の整備も終え、雪解けもすすみ天候にも恵まれたため六十二名の参加者があり賑わいをみせました。今回のメニューは、津軽で食べられる「けの汁」「しとぎ合わせ餅」、秋田の漬け物「いぶりがっこ」です。「けの汁」はたくさんの具材を一センチくらいの食べやすい大きさにカットしていきます。根気のいる作業で主婦歴数十年

のスタッフに私も混じり、ここは頑張りどころと思い張り切って大根を切り始めました。普段家で切る量ではないため二本目を切る頃にはくじけそうになってしまいました。そこに更にベテラン主婦の木村あさよさん、青柳利子さん、坪田タヨさんが参戦してくれ準備したすべての具材（大根・にんじん・ごぼう・ぜんまい・ふき・油揚げ・高野豆腐）を切ることができました。大きな鍋に煮干しと昆布で出汁をとり

具材を投入。火の通りにくいものから順に入れ、最後に赤味噌と糀入り白味噌を入れて完成です。家庭によっては今回入らなかった豆やこんにゃくも入れるところもあります。冬の津軽の保存食で濃いめの味付けにし食べる時に薄めて食べたりしたそうです。「しとぎ合わせ餅」は思い出食堂のマスター田沢忠さんが担当し、指導のもと作りました。もち粉に水を入れ混ぜ合わせタネを作りホットプレートに一枚分ずつ焼いていきます。ホットプレートを使うと一回に五枚は焼けるので時短にもなります。あらかじめ丸めておいたあんを焼き上がった餅で挟むように合わせていきます。前日に準備し作るのですがマスターより「本当のしとぎ餅はあんをくるむから少しタネをかために作るけど今回は別々に作るからタネをゆるくしてみた」と調理日までの間に試作に試作を重ね、もち粉と水の配分を考えてくれ本当に頭の下がる思いです。本来しとぎ餅といえばあんをくるんで平べったくし両面を少し焦げ目がつくよう油で焼くのですが、今回ホットプレートを使用し合わせ餅にしたことで、誰にでも簡単に作れ、尚且つやわらかくおいしいものになりました。「いぶりがっこ」は木村龍一さんが、自分の畑で丹精を込めて育てた大根を燻製にした自家製いぶりがっこです。今まで食べた事のあるいぶりがっこはどちらかというとしっかり干してあり少しかみ切るのが大変というイメージだったのですが、木村さんのがっこは干さずにいぶしてあるので食感もパリパリして食べやすいものでした。木村さんがみなさんに食べてもらうために一番に工夫したところです。青豆・数の子も入り彩りも良くお正月の一品としても出されるそうです。社会交流会館に

会場を移し四回目となりますが、普段なかなかお会いできないみなさんが思い出食堂を介して交流を深めて頂けるようテーブルの配置もその回毎に評価し、今回は密着型と称しテーブルをくっつけてみました。診察・お風呂などの時間の関係で出足が遅かったこともあり、十時頃をピークに十一時頃まで満席状態が続き賑わいをみせ交流も深められたのではないでしょうか。「こういういぶりがっこもあるんだね」、「お餅やわらかくて食べやすい」「うちではけの汁に豆も入るよ」など同じ出身であっても家庭によっては作り方・味付け・具材が違いそこからまた話しが広がりとても楽しい時間となりました。思い出食堂も十四回目となり、いろいろな方から思い出の料理を聞きここまできました。同じ料理であっても家庭によっては味が変わってきます。今は料理をしないという方でも是非我が家の味を伝えたいという方は、思い出食堂のスタッフが皆さまにかわり心をこめてお作りするので遠慮無くおっしゃっていただければ幸いです。

『でごいぶす　豆、ぶりっこ混ぜで
くってたんせ』　（木村　龍一様作）

思い出食堂

木村龍一

療養所で生活する私達、ここ青森は東北・北海道の出身者が大半ですが、関西やもっと南の出身の方もおられます。等しく共通しているのが食べ物のことです。昔食べた味を懐かしく語る方は多いようです。飲食の席には腕自慢の方の持ち込む味で盛り上がることも多くありましたが、高齢化も進んだ今、包丁を持つことも少なくなっているのが現状です。

そのような折り、看護師や介護員がチームを作り懐かしい味を再現しようとして、入所者も協力し「思い出食堂」は開店し隔月ながら十四回にもなるそうです。

私共と最も近い所で看護介護して下さる人達ですので気心は知っているし、子供や孫のような方々です。自宅に帰れば主婦としての一面もあるのですから、料理へのレシピには強い関心を示してくださるようです。食べることは健康で生活する基本であり、おしゃべりする折りには誰もが雄弁になり、お世話する人も受ける人も自然と笑顔になるのです。会場に集う人達の意外な一面もあったりし親近感も湧きます。

なにかと意志疎通が問題視されますが、タイムリーな企画ですので、ご苦労も多いでしょうが関係者の方々には、長く繋げて行くことをお

願いする者です。

今回の車椅子に押されて料理作りに参加した方もおられ、包丁は握らなくても味加減・匙加減は現役なのです。若い人達に一品でも受け継いでほしいものです。

いつも楽しみにしている一人として一品のアイデアがテーブルに並びましたので、ご紹介しておきます。農村の田舎に伝わる昔ながらの漬け物のことです。「いぶりがっこ」は専用のダイコンがあり、細くて長いのです。市販されているのは噛み切れにくいのが特徴ですが、多少工夫することで歯の弱くなった入所者にも独特の香りのある漬け物が実現しました。田舎では、正月料理として青豆とブリッコを混ぜるのです。醤油の味も工夫のうちです。

まずまずの評価でしたのでひと安心しているところです。

おもいで食堂が社会交流会館を会場にしていることも大切なことです。会館の目的として交流の中心としての役目や食も含めての考え方があるからです。どのような形で計画されていくのか分かりませんが、何かの役に協力したいと考えている一人です。

懐かしい味や珍しい料理、私達は今食べる喜びが日常生活の大切なことなのです。

『いまもなお　がっこなければ　ままくえね』

◆社会交流会館だより◆

幻の牡丹？

社会交流会館　学芸員　澤田大介

みなさん、こんにちは！

今年の夏はいかがでしたか？　私の思い出は、奮発して買った国産ウナギを食べた後、お腹を壊したことぐらいです。原因はいろいろ考えられるのですが、体調不良はいつ起きるか分かりませんから、皆さんも気をつけて下さいね。

さて本題は、過ぎ去る夏を惜しむわけではないのですが、初夏の季語でもある「牡丹」、松丘にあった牡丹について調べの付いたところまで書いてみようと思います。

調べるきっかけは今年の四月。樹木医の逢坂さんからある木標の存在を教えてもらったことでした。場所は第一センター寿寮の南側、面会所から道路を挟んで東側にある庭。白いペンキが塗られて朽ちかけた木標には「外島保養園（原文ママ）委託患者引揚記念　牡丹」と記されてありました。逢坂さんによると木標周辺は、牡丹の台木に使われる芍薬が伸びてくるだけで牡丹は残っていないそうです。それが松丘の牡丹について知るきっかけ、どんな牡丹が咲いていたか調べるきっかけでした。

では木標に書かれている「外島保養園（原文ママ）」についてです。正しくは「外島保養院」で現在の「邑久光明園」の前身にあたる療養所です。邑久光明園の「前身」と書きましたが一口に言えるようなことでは無く、そこには悲劇がありました。

外島保養院は明治四十二年に大阪に建てられ

た療養所です。川と海の間の中州に位置し、一帯が海抜ゼロメートルであるため、水害の危険性が高い場所でした。設立後に移転計画が立ち上がりましたが、地域住民の反対に合い移転することはできず、中州の周りを埋め立てることで増築・拡張し患者を受け入れ続けることになりました。そして悲劇が外島保養院を襲ったのは昭和九年、室戸台風の襲来でした。高潮が外島保養院を襲い、患者百七十三名、職員等二十三名の命を奪い、療養所も壊滅しました。残された患者四百数十名は全国六箇所の療養所へ分散委託され、岡山に邑久光明園ができる昭和十三年までのおよそ四年間をバラバラに過ごすことになりました。木標に記されている「委託患者引揚記念」というのは、当時、北部保養院へ依託された患者が邑久光明園へ引き揚げることへの記念ということです。

委託患者は引き揚げるまでの間、お礼として委託先の療養所に記念事業をおこないました。療養所によって道路建設や記念植樹など違いはありましたが、松丘では記念花壇をつくり、百本の牡丹を寄贈したそうです。この牡丹について、昭和十二年十一月号の『甲田の裾』の「感謝欄」にも書いてあり、以下がその引用です。

「牡丹苗木百本　外島保養院委託患者一同　外島保養院派遣職員並に委託患者御一同様には、今回派遣並委託の記念として當地方に珍奇なる牡丹苗木百本御寄贈下され洵に有り難く拝受致したのであります。」

とあり、この文章の後にも感謝の言葉が続くわけですが、問題はこれからです。

一旦、時系列を整理しますと、

昭和九年九月二十三日：北部保養院で患者五十名を受け入れ。

昭和十二年十月十四日：外島職員患者合同記念花壇をつくり、牡丹を寄贈。

昭和十三年六月十八日：依託患者二十名が帰園（死亡、退院等があったようです）。

牡丹の由来はわかりました。次は、実際どのような牡丹だったのか、が疑問になります。牡丹

の時期は冒頭に書きましたように初夏ですので、この寄贈牡丹を『甲田の裾』で取り上げるとすれば、開花の時期、つまり昭和十三年の初夏だと考えて『甲田の裾』にあたるのですが、見つからない。お花の写真が見つからない！

全ての『甲田の裾』に目を通したわけでは無いのですが、寄贈当時から昭和二十年頃までの『甲田の裾』には写真や記事は見当たらず、過去の「園内配置図」にも目を通したのですが、花壇や牡丹のことまでは書いていない。もう、半分はあきらめて、牡丹について調べていたこと自体忘れかけていた時、手がかりは現れました。

納涼祭を終えた次の日（偶然、土用の丑の日の前日ですね）、社会交流会館の図書スペースの整理をしていました。手に取ったのは滝田十和男さんの歌集『木洩れ陽の森』で、その時は何となく開いて序文を読みました。滝田さんの知り合いで短歌の先生でもある中野菊夫先生が担当しており、このような記載がありました。

「この著者とはじめて逢ってから何年たっているだろうか。十年や二十年ではない。三十年以上であることはたしかだ。青森の、ハンセン氏病の療養所に訪ねていって逢ったのだが、季節のことも忘れて思い出せない。なにか牡丹が咲いていたときのように思うがたしかではない。青森保養園の牡丹は大木で、図書館のそばにあって何本かがかたまって咲くので実に見事であった。いまでは、その蔦のとりまいた美しい建物もなく、牡丹は植えかえられて、やせ細ってしまった。一昨年訪れたときは、花どきではなかったが、そのかたわらにいってみると、昔のことが油然と思い出された。」

この序文は昭和六十年に書かれたもので、ここからいくつかのことが分かります。滝田さんと中野先生がお会いした昭和三十年前後には、図書館（昭和十七年建設）のそばに牡丹があった。そして、図書館がなくなる頃には植え替えられていて、昭和五十八年頃には細くなっていたが存在した、ということです。この牡丹が寄

贈された牡丹と同一かどうか定かではありませんが、牡丹の調査をはじめる良い手がかりが見つかりました、と言うところで今回は終わりです。

尻切れとんぼでゴメンナサイ！ここから調べ直して新しいことがわかり次第、誌上で報告したいと思います。また、皆さんの中で「牡丹」について心当たりのある方がいらっしゃいましたら、「社会交流会館　澤田」までご連絡を頂けたら幸いです。

よろしくお願いします!!

参考文献

日本財団、「【People＋】外島保養院 ―室戸台風水害で失われた公立療養所―」、ハンセン病制圧活動サイト Leprosy.jp、2017年、http://leprosy.jp/people/plus10/（最終閲覧日２０１９年８月５日）。

国立療養所邑久光明園、『邑久光明園60周年記念誌』、国立療養所邑久光明園、１９６９年、p.40。

松丘保養園七十周年記念誌刊行委員会、『秘境を開く―そこに生きて七十年―』、北の街社、１９７９年、p.272。

「感謝欄」、『甲田の裾』１９３７年11月号、北部保養院内甲田の裾社、p.19。

滝田十和男、『木洩れ陽の森』、至芸出版社、１９８５年、p.1。

ニューフェイス紹介（令和元年7月現在）

金　良吉（キム　ヤンキル）
（病棟勤務・看護助手）

五月から看護助手として病棟で勤務しています。韓国の南の島「珍島」生まれの韓国人です。まだ分からない事がたくさんありますが、入所者の皆様、スタッフのご指導と支えよろしくお願いします。

齊藤　聡子（サイトウ　サトコ）
（福祉室・事務助手）

まだまだ不慣れなことばかりですが、皆さんから色々なことを教えてもらいながら学んで努めていきます。ご指導よろしくお願い致します。日々精進！元気に頑張りますっ

道善　美枝子（ドウゼン　ミエコ）
（病棟勤務・看護助手）

六月から病棟勤務となりました。まだまだ分からないことばかりで、入所者様や先輩方の温かい指導に支えられ働かせていただいております。どうぞ宜しくお願いいたします。

人事異動

【採　用】
看護助手　金　良吉（病棟）
事務助手　齊藤　聡子（福祉室）
（以上5月13日付）
看護師　道善　美枝子（病棟）（6月15日付）

【退　職】
看護師　藤森　布弥子（6月30日付）
看護助手　関　美雪（7月20日付）

読者からのお便り

◇松丘保養園の機関誌697号拝受致しました。かつてハンセン病検証会議等で保養園に二回お伺い致しました。以来機関誌をご恵贈戴き有難く読ませて戴いて参りました。今回創立一一〇周年に当たっての川西先生の論文等を拝見し、この園の歴史を改めて考えると共に、職員の皆様、療養される皆様の心あたたまるふれあいの実態に触れさせて戴き感動を覚えました。ひと言この感動にお礼を申し上げたく筆をとりました。

（東京都　金平　輝子さん）

◇いつも甲田の裾を送って下さってありがとうございます。

二〇一九年二号にもありますコンサートなどの行事に行ってみたいと思いながらも少し遠いのと、今年車の運転を休んでいることもあり、行けませんでした。

これまでの甲田の裾のいろんな方の投稿で、ご本人、ご家族の歩まれたご苦労を読ませてもらっておりますが、今回のこと（コンサート）は良かったなと思います。

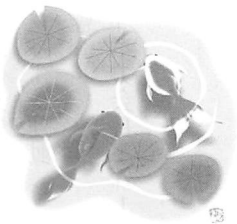
（中略）

盛夏に向かう頃となります。

皆様お身体大切になさってお元気でお過ごし下さいませ。

二〇一九年七月三日

（黒石市　種市良子さん）



自治会日誌

四月中

1日　4／1付転任、採用職員12名挨拶に来訪
〃　第8回執行委員会
3日　女　九十二歳逝去　青森県出身
〃　青森県議会議員一般選挙不在者投票
4日　観桜会実行部会
5日　甲田の裾編集局企画運営会議
7日　青森県議会議員一般選挙投票日
8日　園幹部と執行委員との顔合わせ
〃　青森県健康福祉部保健衛生課　佐藤剛課長代理、外4名挨拶に来訪
9日　第9回執行委員会
〃　青森地方法務局人権擁護課　下山繁子課長、神政史係長挨拶に来訪
12日　資料館問題に関する検討会に出席の為、石川会長出張（～14日帰園）
15日　新採用　澤田大介社会交流会館学芸員挨拶に来訪
〃　東奥日報社　安田奈津子記者来訪
16日　男　八十六歳逝去　青森県出身
〃　観桜会実行部会
17日　第16回園内教育研修セミナー（講師：東京大学空間情報科学研究センター　廣瀬俊介先生）
18日　廣瀬俊介先生による講演とクリーン運動
22日　第4四半期自治会会計業務監査
23日　青森県ゲートボール協会　坪孝夫会長、外1名挨拶に来訪
25日　平成31年度観桜懇親会
〃　女　九十四歳逝去　秋田県出身

五月中

10日　甲田の裾編集局企画運営会議
〃　第10回執行委員会
〃　歌謡交流大会実行部会
11日　「松丘保養園とともに歩む会」幹事会
13日　5／13付採用職員2名　挨拶に来訪
16日　NHK制作局　林原摂子ディレクター来訪
〃　女　八十四歳逝去　北海道出身
17日　歌謡交流大会実行部会
21日　第11回執行委員会
23日　第35回（令和元年度）歌謡交流大会
24日　第12回執行委員会
27日　東奥日報社　安田記者　取材の為来訪

27日　仮納骨堂より納骨堂へ骨壺を移動
28日　朝日放送・朝日新聞社　取材の為来訪
30日　倫理委員会（会長）

六月中

2日　青森県知事選挙投票日
3日　6／1付採用職員1名　挨拶に来訪
〃　曹洞宗　平氏来訪（特派布教及び物故者供養について打ち合わせ）
〃　東奥日報社　安田記者　取材の為来訪
4日　令和二年度予算要求統一行動の為、石川会長出張（～7日帰園）
〃　共同通信社　我妻記者　取材の為来訪
7日　NHK青森放送局　細川記者　取材の為来訪
8日　青森ロータリークラブによる植樹後、石川会長が講話
14日　第14回執行委員会
〃　青森山田高校1年生18名、教員2名、施設見学の為来園、石川会長が講話
〃　企画運営会議
17日　毎日新聞社　岩崎記者、井川記者　取材の為来訪
19日　男　九十三歳逝去　青森県出身
〃　園内教育研修セミナー「ハンセン病はどんな病気」講師：熊野公子先生（皮膚科医師）
20日　納骨堂落慶式
〃　「らい予防による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典・ハンセン病問題対策協議会へ出席の為、石川会長出張（～22日帰園）
24日　松桜会幹事会（石川会長）
〃　松桜会評議員会（石川会長ほか執行委員2名）
25日　新城小学校6年生の授業参観で石川会長が講話
26日　青森家庭裁判所　高山行正総務課長来訪（講演について）
27日　厚労省医政局医療経営支援課　栗原美穂看護専門官、服部真弓看護業務係長来訪
28日　青森管内裁判所裁判官及び本庁管理職員15名来園、石川会長が講話

七月中

1日　青森管内裁判所裁判官及び本庁管理職員14名来園、石川会長が講話
3日　納涼祭実行部会
4日　浄土宗　樋口伸生住職（宮城県石巻市）来訪

4日　園内教育セミナー講演　講師：岡野美子先生（大島青松園園長）
〃　施設見学　静岡短大
5日　第15回執行委員会
〃　不自由者棟入居者慰安（七夕祭）
〃　東京大学　大月敏雄教授、朴みん貞（パクミンジョン）氏来訪（昔の建築物の構造について）
8日　青森県による「ハンセン病を正しく理解するための普及啓発事業」で石川会長が松風塾高等学校へ出向き講話
9日　東奥日報社　安田記者　取材の為来訪
〃　NHK青森放送局　細川記者　取材の為来訪
10日　厚労省医政局医療経営支援課国立ハンセン病療養所管理室　野田室長、嶋原室長補佐来園、石川会長が松丘単独陳情を行った
11日　国立ハンセン病資料館　芳川龍郎管理課長来訪
12日　納涼祭実行部会
16日　新城小学校6年生「年間総合学習プログラム」で来園、6人10グループでそれぞれ入所者と交流
19日　第16回執行委員会
21日　参議院議員選挙投票日
22日　第1四半期自治会会計業務監査
22日　倫理委員会（石川会長出席）
〃　岩手県担当者来園
23日　施設見学：大阪同和人権企業連絡会
25日　第37回（令和元年度）納涼祭
〃　女　九十五歳逝去　秋田県出身
30日　松丘保養園とともに歩む会代表　田中志子氏来訪（地域交流会について）

編集後記

念願であった一、一五五名の御霊が眠る納骨堂の内部大改修を終え六月二十日落慶法要式が執り行われた。私どもは一、一五五名の中の床下に眠る八八八名のご遺骨を何とかしたいと思っていたが、それが施設側の思いと一致したことで大きく前進し、この度の完成につながったのです。八八八名は壺に納骨され、私たちを上部から見守ってくれるようになりました。

特筆されるべきは、内部東西後方の壁面に全物故者の本名、逝去年月日、享年が刻まれていることです。この一、六八七名がこの地で生きた証として銘板に残されたことが法要式での評価が高かったことは印象的でした。

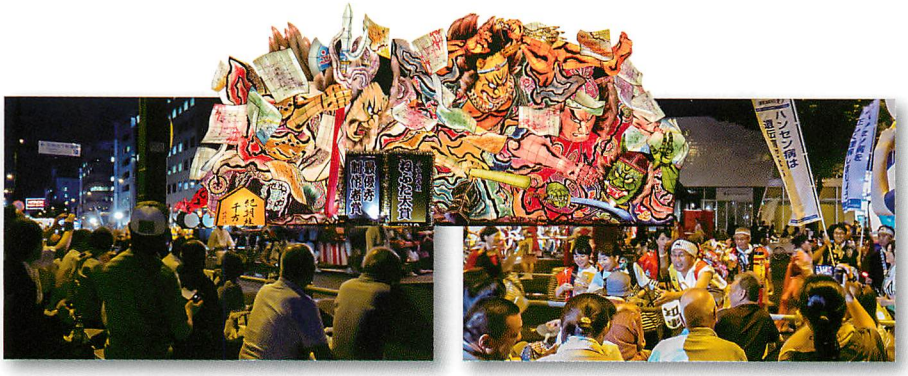
（佐藤　勝）

園内の出来事

納涼祭り　7月25日

令和最初の納涼祭りは３年ぶりに外へ出ました。
社会交流会館、会館前広場で初開催となりました。

ねぶた祭り 観覧　8月6日



観覧場所に三村知事登場 !! 場を盛り上げます。

昭和五年十二月十日創刊
令和元年九月発行
第九十巻
第三号
通巻六九九号

松丘保養園

国立療養所松丘保養園要覧

松丘保養園は国立のハンセン病専門の療養所で、創立してから今年で110年の歴史があり、ハンセン病患者の医療と福祉を事業としております。

所在地　青森市大字石江字平山十九
園　長　川西健登
保有敷地　二三七、九六六平方米（七二、一一〇坪）
建て面積　二三、八一二平方米（七、二一六坪）
延べ面積　二九、四七三平方米（八、九三一坪）

交通案内

□電車の便
1. 東北新幹線・新青森駅下車（車で約3分）
2. 奥羽本線津軽新城駅下車（車で約5分）

□バスの便
1. 青森市営バス西部営業所行
2. 弘南バス浪岡・五所川原・黒石行き　共に松丘保養園前下車

□航空機の便
青森空港より（車で約30分）

□高速自動車道の便
青森ICより（車で約5分）

□なお保養園に隣接して桜の名所三内霊園（1㎞）と国の特別史蹟指定の三内丸山縄文遺跡や県立美術館（2㎞）等があります。

発行所
一般財団法人　松丘保養園松桜会
所在地
〒〇三八―〇〇〇三
青森市大字石江字平山十九番地
電話 (017)(788) 〇一四五・〇一四六
発行人　川西健登
編集人　甲田の裾編集委員会
印刷所
青森市本町二丁目十一―十六
青森オフセット印刷株式会社
電話 (017)(775) 一四三一番